

行雲流水

No. 7 令和3年4月5日発行

「特別支援教育（個別最適化）」は、すべてを包摂する大きな「傘」である

校長 寒河江 正人

子どもたちは、一人ひとりが、みな違う。

「特別支援教育」は、障がいをもつ児童生徒のみを対象としたかつての「特殊教育」ではない。**すべての児童生徒を対象とした教育支援の「基盤」「前提条件」となるものである。**

私も含め、人間は一人ひとりみな親から受け継いだ「**遺伝的因子**」と、これまでの成育歴等による「**環境的因子**」に起因するホモ・サピエンス「ヒト」という生物としての個々の特性・特徴を有している。これは、決して逃れることのできない事実である。

得意・不得意、好き・嫌い、興味関心の分野領域の別や度合いなど、挙げたらきりが無い。
私たちの特性は、本来、不定形・不均質で、かなり「**デコボコ**」なものである。
だからこそ人間は、一人ひとり違う「個性」があって「存在意義」があり、その個性が、
「**一人の人間として、自他ともに認められ、尊重され、愛されること**」が理想である。

およそ150年間続いてきた我が国の教育システム・教育風土は、「みんなで同じ内容を、同じ場所で、同じスピードで、同じルールの下で行う」という「**集団統制**」と「**平均化**」によって、「公教育」としての一定の役割を果たし、効果を挙げてきたことは揺るぎない。

しかし、一方ではそれが高じて、子どもたちを取り巻く環境に「**同調圧力**」と「**均質化**」が強まり、「**あの人変わってる**」「**わがままだ**」と言われ、周囲とのコミュニケーションに「**生きづらさ**」を抱える子どもたちの増加を助長した側面があることも否めない。
いじめや不登校、学級崩壊など、その背景にはこうしたことが起因している場合もある。

かく言う私も、みなさんも、自身の特性上、実は何らかの「**生きづらさ**」を抱えていて、自分と向き合い、何とか周囲との「**折り合い**」をつけながら、学習したり、仕事をしたり、多少なりとも、苦慮・工夫しながら、生活してきたのかもしれない。

教育の根幹を成す「生徒一人ひとりの実態（教育的なニーズ）に即した学習権の保障」という視点に立てば、学習指導も生徒指導も、すべての営みは「特別支援教育」という実に「大きな傘」の下で「個別最適化**」に努め、展開されるべきだという理解に帰結するのだ。**